

⑭棄却検定法に就ての一注意

兼所員 増山元三郎

大学の講義では私は注意しているが、一般に気が付かず犯さ^れている誤りに、棄却検定法の使い方があ^る。

√大ききNの無作為標本 $O_N(x_1, x_2, \dots, x_N)$ について、あ^る棄却が問題になる時^の値 x_0 が何か他の根拠から、他の値と同一母集団に属することが疑われる場合(I)と、 x_0 が他に比して大き過ぎる又は小さ過ぎると考えられる場合(II)とある。Thompsonの公式^は(I)に対するものであつて、(II)に対するものではないのに、(II)に使う人が多い。拙著少数例を注意深く読まればこの区別は明らかであるが、毎足らずの解説のためか誤用されている。

(II)に対してはH.B. Смирнов : Доклады, 33 (1941), 346を用いるように拙著に書いてあるが、科学測器 生 (1944), 228にも紹介してある。

豫め管理水準を実験的に定めて品質管理を行う場合は(I)と同じ式を基にした棄却限界法が役立つが、実験データで大きい値や小さい値を棄てる場合に(I)の検定法を使うのは正しくない。

農林省の畑村技官が研究所の坂元所員に尋ねられた事項であるが、よく見受けられる誤用なので、この際茲に御返事を載せて置く。